下関市蓋井島の方言

― 音声面の二，三の現象から ―

岡　野　信　子

はじめに

蓋井島（ふたおいじま）は響灘（ひびき）上に浮かぶ一小島である。かつては豊浦郡豊西村の内であったが，昭和29年，境界変更によって下関市に編入され，吉見（よしみ）支所の管轄内に入った。吉見との間に，現在は1日2便の連絡船（45分）がある。

島の小学校に保存されている記録（筆写）には，この島は本村の吉母（よしも）を去る西南7海里半の海上にあって，南北1里，東西30町，周囲およそ3里16町，面積0.83方里と記されている。全島ほとんど山地であるが，島の西南側に抱く湾に沿うて，わずかな平地がある。39戸178人の一集落は，その湾にのぞんで山の斜面に営まれている。

島に住む人々は，ほとんど（小学校の先生以外）先祖代々の土地っ子であるが，他地に働く間に配偶者を得て帰島した人も，3，4名はいるということであった。今日，人々は漁業を主たる生業としている。かつては農業が主であったが，明治10年代からは次第に漁業にも力をそそいで今日に到った。ここは海女の島でもあって，イソモノ（あわび・さざえ・うになど）の漁獲の多くは，女性の働きによっている。古老の言によれば，明治のころには，福岡県宗像郡鐘崎の海女が，この島に小屋住みをして働いていたこともあるという。

北九州にも2時間の航路であるこの島では，鮮魚類は北九州市若松区の魚市場に出している。ただし，その他の交易，教育等々の諸関係は，下関市の地方（じがた）との間に深い。昭和44年，吉見中学蓋井分校が廃せられて以来，中学生は吉見の寮に起居して本校に通っている。現在は高校に進む者も多いという。

本土の長門域と，九州の筑前域との間の響灘上に，小さな飛石のような位置を占めて，上述のようなくらしを営むこの島では，方言はどのような存立状況を見せているであろうか。この小報告では，島ことばの音声上の2，3のこと――［ai］連母音の同化現象，ラ行音節におこる諸変化，そして長呼現象――をとりあげて，それらの意

味することについて考えてみたい。

これまでの調査は，昭和47年4月2日～5日と，同年8月28日～8月30日の2回である。以下に記す資料は，その折に得た2,070枚のセンテンスカード（1部は録音を文字化したもの）中よりとりあげたものである。調査では，土地人の自然な発言の中に，島の方言生活の全一体を把握することを心がけた。第2回調査では，音声面に特に留意したが，その際も，語を羅列して発音をたしかめる方法はとらなかった。外来者に対しては共通語風に発音することも多いこの島では，そのような調査法は有効でなかった。すくなくとも以下にとりあげた3項については，質問調査で自然な発音を得ることは困難であった。

Ⅰ ［ai］連母音の同化現象

この島では［ai］連母音はさまざまに発音される。あらたまった発言では，キカ**イ**※（機械）ワカ**イ**（若い）のように不同化音で言うことも多い。方言音としては，キカャ**イ**※・キキャー・ワカェエ・ワカー等々のさまざまな発音があって，一定していない。同一話者の発言の過程で，同一語がそれぞれ違った音相であらわれることもある。また一語中に［ai］連母音が二ケ所にある時，デャータ**イ**（大体）のように，前後の［ai］連母音の音価の異なる場合もある。

※［e］に近い音をイ，［i］に近い音をイと表記する。

以下に，［ai］連母音の同化音を持つ方言事象を，活用語と不活用語とに大別して，その同化相を記述する。両者の同化状況にはいくらかの差異が認められる。なお，語幹に同化音を持つ形容動詞は，活用しない語の部にとりあげている。動詞の場合は，語幹，語尾のいずれに同化音が現れても，活用語の部にとりあげている。ここに記すのは単語形（必要があれば話部）であるが，文末詞の場合は文全体をとりだしている。

1 準同化現象

準同化とは，同化しきってはいないが，同化の傾向は認められるという存立状況を言う。この用語は，佐藤虎男氏の「瀬戸内海域方言音声の地理学的研究――瀬戸内海言語地図「長い」について――」<方言研究年報第14巻>から拝借した。

後続［i］母音は前接［a］母音にひき寄せられて，［e］（イ）に近くなることもあり，広がって［ε］（エ）となることもある。一方，前接［a］母音の調音点はいく

らか奥まったり，逆に前に出ている場合もある。前者を［ɐ］（片仮名表記ではタャのように小さくャを添える），後者を［æ］（タェのように小さくェを添える。）と表記した。このほか，先行子音が口蓋化して，［Cjae］（キャイなど）と聞えることもあった。

（1）　不活用語に認められるもの

この下位では，品詞による分別を行なわないで，先行子音の等しいものをまとめて並べている。

a　［Caɛ］（<［Cai］）

後続母音［i］が［ɛ］と交替しただけであるが，同化傾向はここにも認められる。

アエノシマ	藍島	ダェータエ	大体
クラガエ	飯櫃	マエバン	毎晩
ヤマエ	病	サンサエ	3才
ハエモチ	もっこ	ハーエ	はい（応答詞）

○ドコノ　コ　カエ。どこの子かい。（老女→中女）

○ヤッパー　ヨロコブ　ガエ。孫がやはり喜ぶよ。（老女→筆者）

［ɛ］<［i］の現象は語頭にもあらわれる。老人の教示によれば，かつては「亥の子」はエンノコであった。

b　［Cɐe］（<［Cai］）

ナーンバャイ	何杯	タャイテー	たいてい
ダャイ	代	シダャイニ	次第に
オダャイジニ	お大事に	カャイサク	開作
カャイホー	開放	キカャイ	機械
アンガャイ	案外	グラャイ	ぐらい（助詞）
サャイコー	最高	サャイゴ	最後

○ダイリョーバタ　タテテ　モドッタ　ダャイ。大漁旗をたてて帰ってきたぞ。（老男→老男）

○ナンジャロー　カャイ。何じゃろうかい。（老女→老女）

c　［Cɐɛ］（<［Cai］）

ダャエタエ	だいたい	カャエセン	回線

マャエニチ　毎日　　サャエゼン　最善

タャエギナ　大儀な（おっくうな）

○ヒドカロ　ダャエ。体が疲れるだろう。（青男→青男）

○ナシャロ　カャエ。なぜだろうかい。（青男→青男）

c′　[Cɐɛ]（<[Cai]<[Cani]）

ナカャエ　中に　　シマャエ　島に

アタマャエ　頭に　　ヤマャエ　山に

助詞「に」が続く際に，まずナ行子音が落ちて，それによって生じた［ai］連母音に，同化の傾向のあらわれることは，きわめてさかんである。

d　[Cjae]（<[Cai]）

デャイブ　だいぶ　　キキャイ　機械

ホーキャイボー　放胆者　　ホーキャイナ　どはずれている

ナンキャイモ　何回も

○ドー　ショー　キャイ。　アンター。どうしようかしら。ねえ。（青女→青女）

e　[Cjaɛ]（<[Cai]）

キキャエ　機械　　ギャエコク　外国

○ナギジャロー　キャエ。海はなぎだろうかね。（中女→中女）

e′　[Cjaɛ]（<[Cai]<[Cani]）

シミャエ　島に

f　[Cæe]（<[Cai]）

ダェイマル　大丸（個有名詞）　ニコーカェイ　2航海

g　[Cæɛ]（<[Cai]）

タェエテー　たいてい　　ダェエガクセー　大学生

ダェエブ　だいぶ　　ジダェエ　時代

リカェエ　理解　　イッカェエ　1回

シナェエ　市内　　コーハェエ　後輩

○ムギョー　ツキャー　センカッタ　カェエノ。麦をつきはしなかったかね。（老女→老男）

（2） 活用語に認められるもの

a ［Caɛ］（<［Cai］）

ワカエ　若い　　ナエ　無い

マエッテ　参って

［ɛ］<［i］の現象は［o］母音の後にも起って，フトエ（太い）オソエ（遅い）のように言うこともある。またエレヨッタ（入れたものだ）のように語頭でも母音交替が行なわれる。

b ［Cɐe］（<［Cai］）

オモタャイ　重い　　ワカャイ　若い

ナャイ　無い　　アラャイ　荒い

ウルサャイ　うるさい　　チーサャイ　小さい

タャイテ　炊いて（焚いて）

c ［Cɐɛ］（<［Cai］）

ワカャエ　若い　　ナャエ　無い

d ［Cæe］（<［Cai］）

ナェイ　無い　　エラェイ　えらい

イキナェイ　行けよ（ナェイは軽い敬意をあらわす助動詞）

e ［Cæɛ］（<［Cai］）

ワカェーエ　若い　　ナェエ　ない

チーサェエ　小さい　　マェエル　参る

これらが7日間に記録し得た準同化事象である。この同化傾向は活用語においては不活用語におけるよりも劣勢で，［Cjae］［Cjaɛ］などはない。また活用語では前接母音［ɐ］のものが［æ］のものよりいくらか優勢である。

以上のような同化の傾向が更に進めば，［Cɐ:］，［Cja:］，［Cæ:］，［Cɛ:］の相互同化となるのであろう。

2　相互同化現象

相互同化現象は準同化現象よりは劣勢である。

（1） 不活用語に認められるもの

a ［Cɐ:］（<［Cai］）

タャーフー　台風　　ダャータイ　だいたい

クイキナャー　区域内　　サャーサン　採算

タャーギデ　大儀で

b ［Cja:］（<［Cai］），（<［Cai］>［Cani］）

デャータイ　だいたい　　キキャー　機械

ニキャーダテ　2階建　　クミアイインギャー　組合員外

ミャーニチ　毎日　　カンジャーカ　管財課

シミャー　島に　　ヤミャー　山に

ナキャー　中に

c ［Cæ:］（<［Cai］）

タェーテー　たいてい　　カブシキガェーシャ　株式会社

マェーニチ　毎日　　マェートシ　毎年

ザェーニンチュー　在任中

d ［Cε:］（<［Cai］）

［ε:］の認められる事象はまれで，アネー，コネー，あるいはドネーナなどの指示形容動詞と文末詞ゲー（時にゲとなる）である。文末詞ゲーはガイの場合もあるが，指示形容動詞の場合は，アナイナなどはまったく用いられていない。

○ソコニ　アロー　ゲー。そこにあろうがい。（小男→小男）

これらは不活用語に認められる相互同化現象である。活用語ではナャー，ナェー（無い）がまれに聞かれるだけである。さきに準同化とよんだものの場合も，活用語ではいくらか劣勢であったが，相互同化の場合はまったく勢力が落ちる。文末や話部末が不安定な音に終ることを自然にさけて，［Ca:］に落着きやすいのであろうか。あるいは活用語は不活用語よりも形が変りやすいために，次に記す順行同化をいち早く起したのであろうか。

3　順行同化現象

後続母音が前接母音にひきつけられて［Ca:］（<［Cai］）となることを言う。

（1）　不活用語に認められるもの

アーダ　間　　アーサツ　挨拶

マヤー　間合　　ターフー　台風

ターテー　たいてい　　ダイター　だいたい

ダーショ　いくらか　　デンダー　ぜんざい

カースイヨク 海水浴　タイガー　たいがい

マーク　マイク　ナーギ　内儀（茶の間）

サーハイ　采配

文末詞ワイは述部と熟合して「オー　マダ　ツイチョラー。（おおまだテレビがついてるわい。）のように言う。ツイチョル　ワイ＞ツイチョライ＞ツイチョラーと変化したもので，ライ＞ラーの順行同化が起こっている。

○アマー　イコー　ガナ。女は海女に行くだろう，ね。（老男→筆者）

○モノ　ウラー　アガルホデス　イネ。うにが藻の先端に上るんですよね。（中女→筆者）

「アマー」「モノウラー」が「海女に」「藻のうらに」であるならば，ここにも順行同化を認めることが出来る。

（2）活用語に認められるもの

a　形容詞に認められるもの

イター　痛い・オモター　重い・タカー　高い・チカー　近い・ワカー　若い・ミジカー　短い・ナガー　長い・アマー　甘い・コマー　小さい・セマー　狭い・ナー　ない・スクナー　少ない・センナー　いそがしい・ヤゼナー　うるさい・コソケナー　段ちがいである・キシャナー　きたない・ミタムナー　みっともない　ショーガナー　しかたがない・ドーラクナー　だらしがない・エラー　体が苦しい（「偉い」の意にも用いる。）タリクサー　足りそうもない・ヒヤー　つめたい

b　動詞，助動詞，および動詞を基幹とする話部に認められるもの

アータ　開いた・ターテ　炊いて（焚いて）・カターデ　担いで・カートル　書いてある・ナータ　泣いた・ハタラーチョル　働いたものだ・コサーデ（くっついているものを）こさいで・ヤーテ　焼いて・ハーテ　はいて・マー　まい（助動詞）ハーッチョル　入っている・イカーデモ　行かなくても

順行同化現象は活用語，不活用語いずれにも起るが，活用語に特に優勢である。一週間に得た異なり語数では，不活用語の15語（3話部を含む）に対して，活用語は34語であるに過ぎないが，延語数では，前者の20語に対して後者は84語にのぼっている。

蓋井島における［ai］連母音の存立状況は以上のごとくである。得られた実例の範囲では，不活用語の場合は先行子音が［t］，［d］，［k］，［g］の場合に同化が起り

やすく，［m］，［n］の場合がこれに続いている。活用語の順行同化は先行子音にかかわりなく優勢である。年層による使用差は青年層以上ではほとんど認められないが，小，中学生の場合は，活用語に順行同化が起るだけである。もっとも，アネー・ソネーや文末詞ゲー（ゲ）の［ɛ:］音は語に固定していて，小・中学生も用いる。

4　［ai］連母音同化現象から見た蓋井島方言の一性格

山口県下の［ai］連母音同化とその分布について，藤原与一先生は次のように示された。

「安芸の全体に見えるこの傾向（筆者注［a:］の傾向）は，さらに周防長門の全面においても見ることができる。しかし注意すべきは，周防の西部，長門の中部において，点々と［æ:］が聞かれることである。周防大島でも同様なことがうかがわれる。」＜「国語方音における［ai］連母音の諸相」＞（『方言研究叢書』第1巻所収による。）前川秀雄氏はこのような分布を単純化して「防府市の周辺から萩市の周辺にかけて，連母音の［ai］は［ɐ:］であるが，その他の地では［a:］である。」＜『方言学講座』第三巻＞と言われる。

筆者の調査では，たとえば山口市平川の老人ではタャイ（鯛），ダャエズ（大豆），キャエ（会）などの準同化がもっとも盛んで，ときに相互同化のイキャー（大きい）なども言う。［ɛ:］はドネーニ，ソネーナ類の語詞に固定的に存するだけである。順行同化も劣勢で，助動詞マー（まい），および文末詞ワイが述部と熟合したクラー（来るわい）などに限られている。長門域の萩市における同化状況も，山口市の場合とほぼ同じであるが，コンマー（小さい）のような順行同化の形容詞を漁業区で聞くことがあった。萩市から南下するに従って，沿岸域では活用語の順行同化現象が優勢となる。準同化現象，相互同化現象の衰退の傾向は，長門南西部の漁業区で特に顕著であった。対岸域のこのような状況に比して，蓋井島では準同化，相互同化もかなりさかんな点に特色が見られる。

山口県下の相互同化（準同化をふくめて）については，『方言学』（藤原与一先生著）473頁に「山陰，出雲地方以東にまた相互同化の傾向が著しく…略…。山陰のこうした状況は，山口県下の/Cai/＞/Cææ/を介して，九州の状況につながっているとは見られないだろうか。」の教示がある。これに依れば，蓋井島における［ai］連母音の同化状況は，山陽的同化の優勢な中に，山陰的同化もまたかなりに根強いことを示していると理解される。山陽路の最西端であるとともに，山陰と九州肥筑地域の間

の，飛石的位置をも占めるこの島の方言の一性格がここに見られる。この島でも，今日，子供たちのことばには，活用語の順行同化があるばかりである。山陰的な準同化，相互同化は，今後，衰退の道をたどるばかりであろう。

Ⅱ　ラ行音節におこる諸変化

蓋井島の方言では，ラ行音節に以下のごとき諸変化の見られることがある。

1　ラ行音節の隠在

これは中年以上の人々のことばに，ときに聞かれる程度のものである。

（1）［ra］・［ri］音節の隠在

［ra］の隠在したものとしてはダ**イ**ガー（だいがらうす），［re］の隠在したものとしてはヤッパー（やはり）が得られたばかりである。

（2）［ru］音節の隠在

○ミナ　カキンナー。先生は私の言うことを全部書かれる。（中女→筆者）
○バーサンガ　ヒトリ　ナンナー。お婆さんが一人になられる。（老女→老女）
○フタガ　アケチャー　ホカ。蓋があけてあるのか。（老女→息子）

［ru］の隠在は文末，または文末に近い話部末におこる。筆者のこれまでの調査では，山口県下でこのような［ru］の隠在を見ることはなかった。九州の筑前域ではきわめて優勢な現象である。

（3）［re］音節の隠在

○ダーガ　キチャッテモ　〜。誰が来られても……。（中女→筆者）
○アーノ　ソンガ　ワカレテ　デキタ。この島の住民はあれの（あの家の）子孫が分れて出来た。（老男→筆者）
○コーナ　トボケ。この間抜けめ。（老男→青男）
コーナの出自は「これなる」であろう。
○ヒーナ　マー　ショーガナ**イ**。そんならまあしかたがない。（老女→筆者）
ヒーナは「それなら」の転じたものである。いずれも長呼の部分に［re］音節の隠在が認められる。［re］音節の隠在は，代名詞，および代名詞を構成要素に持つ接続詞に認められる。

2　ラ行音節の脱落

この現象も特定の語にかぎって起る。男生徒の言った「センセー　モッチョン。

（先生持っているの。）」では，「持っちょる」の「ル」が落ちている。このような「ル」の脱落は青少年のことばに聞かれる。さきにあげたコーナもその出自「これなる」からみれば「ル」の脱落であり，ヒーナにも「ラ」の脱落が見られる。ヒーナはヒナともヒナラとも言う。コーナ，ヒーナともに老人ことばである。一中年女性は，「ソレオ　コー　ホータナゲテ　ネー。（それをこう，ほうたり投げてねえ。）」と言った。「ホータナゲテ」における「リ」の脱落などは偶然のものであろうか。

3　撥音との交替

この島の方言では，ラ行音節が撥音と交替することは，ナ行音節の前に限って起こる。

（1）［ri］音節の場合

○イマ　アゲョンナッタ　ヨー。いま波止場で魚をあげておられたよ。（中女→中女）

○バーヤン　オドンナル　ノー。婆さん，うまいこと踊られるのう。（中男）＜老母の盆踊りを見て＞

○モッチョンナレマー　カ。あの人が持っておられないだろうか。（中男→中女）

［ri］と［n］との交替現象は，「なさる」系の日常敬語であるナルの前にだけあらわれる。全年層にきわめて優勢で，筑前方言との近さを思わせる。

（2）［ru］音節の場合

○トショー　トンヂ　ヨ。年老いるなよ。（老女→青女）

禁止のナの前のルが撥音と交替することも優勢である。

（3）［re］の場合

○コンナ　オバーチャン　ナンボジャロー　カエ。このおばあちゃん　年はいくつだろうかな。（町の人のことばを老女が再現してみせたもの）

○アンニ　アエガ　マウッソヤロー。あそこにあれが舞うんだろう。＜扇風機を指さして＞（老女→筆者）

○アンネ　フターツ　アロー　ガナ。あそこにふたつあるだろう，ね。（老女→筆者）

コンナはコーナとおなじく「これなる」であり，アンニ，アンネは「あれに」であろう。レがンと交替することはコンナ，コンニ，アンニなどの，いくつかの指示語に限

られている。

4　ラ行子音の脱落

［r］子音が脱落して［e］（あるいは［ε］）となること，さらに［i］となることは，この島のことばではいずれもかなり優勢である。

（1）［e］，［ε］（<[re]）

○アシャー　アエガ　ヒトリジャケ。私はあれ（あの息子）が一人きりだから。（老女→筆者）

○ソエデスッ　チャネー。そうなんですよねえ。（中女→筆者）<相手のことばへのうなづき。>

このほか，接続詞のホエカラ，ヘーカラ，スェーデなどにも［ε］（<[re]）の現象が見られる。

［r］子音の脱落現象は，指示代名詞，あるいはそれを構成要素に持つ接続詞に起こっている。ただし，アレ，ソレ，コレ，オレ（俺）に助詞「を」（又は「をば」）が続く場合は，母音［e］と［o］の逆行同化現象が先行して，アロー，ソロー，コロー，オローとなる。

［r］子音の脱落現象は，また以下に記すように，敬語助動詞のレルやナレタ（ナルの連用形にタの続いたもの）にもあらわれる。

○ヨー　キーチョラエル。先生はよく聞いておられる。（中女→筆者）

○ハダカデカラ　ネー。モグリヨンナエタ　ガネー。私の母ははだかで海にもぐっておられたがねえ。（老女→筆者）

そのほか，動詞にこの現象の認められることもある。

○ハナエチョルケー　ネー。子供が親と離れているからねえ。（中女→筆者）

（2）［i］（<[e]<[re]）

［r］子音を落とすとともに，［e］，［ε］が［i］と交替することも多い。この現象は［e］，［ε］（<[re]）の場合と同じく，指示語や，日常敬語の助動詞ナレ（ナルの連用形）がタに続く時にあらわれる。

○ダイジャロー　キャエ。誰だろうかい。（中男）

○オイ　カエ。俺かえ？（老女→筆者）

○コイジャッタラ　ミンナガ　デテ　トルホドノ　コトモ　ナイ。これだったら皆が

海に出て取るほどのこともない。（中女→筆者）

○アイデモ　チョット　ミテ　ミヨー。あれでも（そうは思うけど）ちょっと見てみよう。（中女）

○ホイ　キャー。そうかね。（中女→老女）

○ホイケ　エー　トコ　ナー。だから島はいい所ですよねえ。（老女→筆者）

○ミミガ　スエッタチ　イーナイタ。（でんわであんまり大きな声を出すものだから）耳が聞こえなくなったと言われた。（老女→筆者）

○ヨート　ミチョー　ミテ　イキナイ　エー。

［i］に転じることは，［e］，［ε］に転じるよりもさらに頻度が高い。ただし助動詞レルはエルとはなるがイルとはならない。

5　ラ行音節におこる諸変化の意味すること

ラ行子音のよわまり又は脱落の現象については，それが山陰と九州に顕著であることが※明らかにされている。

※藤原与一先生著『方言学』471頁～472頁

室山敏昭氏「山陰方言の音声学的研究」＜鳥取大学 教育学部研究報告（人文科学）第21巻第1号＞

蓋井島の方言に見られる，上述のようなラ行音節上の諸変化は，この島の方言が，山陰九州の系脈中にあることを立証する，一特性であると言えよう。ところで，この現象は山口県本土部でも点々と拾うことが出来る。たとえば，『全国方言資料』第5巻所収の，都濃郡都濃町の老人の会話には，ハエノ(晴の)，オヤスミンサエマセ（おやすみなされませ），オフロエナエトー（お風呂へなりと），ソエデア（それでは）などが見えている。筆者の調査でも，萩市ではシナエタ(死なれた)，キサェエタ（来られた）の言いかたは優勢であった。山口市平川の老人は「アイラーデモ　ネー。」（あれら――あの人たち――でもねえ。」と語った。蓋井島にもっとも近い吉母，吉見でも，「アンニ　ハエガ　オラー　ヤ。(あそこにはいがいるよ。)」とか，「ソイジャッタ　カイナー。（そうだったかねえ。)」がときに聞かれる。ただし，蓋井島にさかんなオドンナル（踊られる）や，ナンナー（なられる）などは聞かれない。長門の本土域には稀薄な山陰九州系脈性が，この島の方言にはかなりに濃い状況を見ることが出来る。

Ⅲ　長　音　現　象

蓋井島の方言音声でまず耳を打つのは，「アノ　ナーア。（あのねえ。）」「ホイテナーア。」のような文末長呼音である。中年以上の人々のことばには，このような長呼がナ行文末詞のほかにも聞かれる。以下に品詞別に語例をあげる。同一品詞の内部では音節数の少ないものから順にあげ，同一音節語の中は，長呼の位置によって整理している。なお，単語としてあげにくいものは話部をとりあげている。

1　品詞別実例

（1）名　詞

a　1 音 節 語

セー　岩　　ホー　ほ（準体詞・文末詞）

b　2 音 節 語

バーン　番　　モーリョー　守を

アーンニ　あれに（あそこに）

ツーレ　連　　カーシ　菓子

ニージ　虹

ヤクー　役　　ハコー　箱

フロー　風呂　　タルー　樽

ミナー　皆　　ウチーニャ　内には（主人は）

ババーニャ　馬場（姓）には

c　3 音 節 語

イーヤリ　蟻　　ヨーナベ　夜業

ミーンナ　皆　　ターマチ　田町（たんぼ）

ヨーズキ　夜突

ヨーズリ　夜釣　　ヨーダキ　夜焚（夜，あかりをつけて漁をすること）

ヒートリ　1人　　ミンーナ　皆

フターリ　2人　　フターツ　ふたつ

アベャーク　わやく（ふざけごと）

コンドー　今度　　ヒーテーニ　1日に

これらの中で，「夜突」「夜釣」にはヨーズーキ，ヨーズーリと長呼が2ケ所にあ

らわれることがあった。

この島では「あれを」「これを」の類はアロー，コローと言うことが多いが，これに助詞「ば」が続くと，アローオバ，コローオバとなる。これも長呼の1種であろう。

d　4 音 節 語

イーッパ**イ**　1杯　　ナーンバャ**イ**　何杯

サーンニン　3人　　アキャーガリ　はねっかえり

ヒューマンゴ　曽孫　　サケノセー　酒の瀬（岩の名）

アニーサン　兄さん　　カイクーゴハン　かやく飯（五目飯）

（2）動　詞

シーモッテ　しながら　　ホーカッチョク　ほっておく

動詞に長呼現象があらわれることはきわめてまれである。このほかに，「オアガリー　ナ。（お上りなさいな。）」「オ**イ**キー　ネ。（お行きよ。）」のように，連用形による命令表現において動詞末尾を長呼することは，長門地域に一般に行なわれている。

（3）形 容 詞

ワカェーエ　若い　　ナガェーエ　長い

ナガーア　長い　　ヤークサー　布・綿の焼けるにおい

キシャーナー　汚い　　オモタャー**イ**　重い

オカシー**イ**　変だ　　ヤサシー**イ**　優しい

ヨートシガナー　みかけがよくない

イソガシー**イ**　いそがしい

老女に聞いたヨートシガナーを中年女性にたしかめるとヨトシガナ**イ**であった。このほか，「ザマーノナー　トコ（取りちらした所）」の「ザマーノナー」は，そのアクセントからすれば2語であろうか。いずれにしても「ザマー」は「ザマ（様）」の長呼である。

形容詞では，ワカェーアエのように，長呼が2音節に相当する長さを持つ場合もある。このほか，「シーロ　ナッタ。（白くなった。）」「コーモニ　キッテ（小さく切って）」は，「シロー」「コモー」の長呼の位置が動いたものであるが，きこえはやはり一種の長呼である。

（4）形容動詞

スーキーデ　好きで　　アーンキナ　のんきな

ターイギナ　大儀な（おっくうだ）

（5）副詞

ジーット　じっと　　シャーット　しゃんと

チャーット　きちんと　　イマーニ　今に到るまで

イツーモ　いつも　　ヒトツー　ひとつ（試みに）

ナーンサエ　何にも　　マャーイヒニ　毎日

イーットキ　しばらく　　ヤーッパリ　やはり

コナーイダ　この間　　イッコーニ　いっしょに

（6）助動詞

タルマイー　足るまい　　ツンナーッタ　釣られた

シトーオデ　したくて　　キチョッテジャー※　ニネ　来ておられてだわね

※ジャーは文末詞に近くなっている。

（7）助詞

イワスルトー　言わせると　　ウマレタナーリデ　生れたままで

（8）文末詞

○アノ　ナーア↗。　あのなあ。

○コンダ　ネーエ。　今度はね。

○ヌクイ　ダーイ。　暖いぞ。

（9）感動詞・感動文

ハーイ・アーイ・フーン・ウーン・ヤーレ・アリー・アーリー

2　長呼事情について

長呼された語のアクセントの型と，もとの語のアクセントの型との間には，次のような関係が認められる。

a　語頭，語中の音節が長呼される時，長呼部の高低は前の音節に従う。本来の音節を○，長呼部を—で表記すると以下のとおりである。

○—○ ＜ ○○（ツーレ，カーシなど）

○—○ ＜ ○○（モーリ，バーンなど）

○○—○ ＜ ○○○（フターリ，アベャークなど）

○—○○ ＜ ○○○（ヒートリ）

○○—○ ＜ ○○○（ナガェーエ，ワカャーイ）

○—○○ ＜ ○○○（ターマチ，ヨーズキなど）

ここには2，3音節語を例にあげたが，1音節語，あるいは4音節以上の語でも同様である。

b　平板アクセントの語の語頭音節を長呼した時は，語頭から高音が連続する。

ニージ（虹）・イーヤリ（蟻）・ヨーナベ（夜業）

c　語末音節が長呼されると，原則として長呼部分は低音である。

タルー（樽）・ミナー（皆）・フロー（風呂）・アスコー（あそこ）

低音になるはずの語末長音が，ヤクー（役），ヒトツー（ひとつ）のように，前の音節に続けて高いのは，語頭，語中音節の長呼の場合への類推であろうか。

以上は得られた語例の範囲での考察にとどまる。今後さらに多くの語例を得て考えたい。語頭，語中音節の長呼と語末の長呼とでは，アクセント上に差異があるのは，その長呼の性質（長さなども）にいくらかの違いがあるためであろうか。

蓋井島における長呼現象はさして優勢ではない。語中の長呼は「ヨーズキ」のように，〝やや長い〟と感じる程度にすぎないこともたびたびであった。また，長呼と聞こえたものを，調査者が再現してみると，話者はそれを否定して，「ツレ」「ヨダキ」と短呼で答えることもしばしばであった。長呼が固定しているのは，ヨーナベ，イマーニなどのわずかの語である。これらのことは，蓋井島の長呼現象の衰退を示すものであろう。

ところでこの島には，長呼現象と表裏一体のものかと思われる促音挿生の現象も認められる。

テッショ（手塩—お皿）・タッコンバチ（竹の皮で張った笠）・アッキャーガリ（はねっかえり）・ワレガッチ（われがち）・フエッタ（増した）・ニゲッチョル（逃げている）・カッケッテ（馳けて）・タッケル（叫ぶ）・フットイ（太い）・ヤッレ（感動詞やれ）

長呼しがちな話者は，一方では促音を挿入して言うことも多かった。また「ミナ　カキンナー（先生は全部書かれる。）」や「ヤキハリ　シタ　インナ。（やけどをしたよね。）」の撥音も長呼と同種のものであろうか。これらから推して，長呼の発

生は強調意識にもとづくかと察せられる。形容詞，形容動詞，副詞の長呼には，話者の強調の意図を感じさせる場合が多かった。

このような長呼事象は，山口県の本土部でも点々と拾うことが出来る。筆者の手元のカードにも，カーミ（神）・ヒートリ（一人）・キータ（来た）・ボクサャーエ（つまらない―性向語）・ヒーサン（久しく）・オットーリ（大体）<以上，山口市平川>
<アタクシラーズーレ（私ども年配）<萩市>　ナーント（なんと）<豊浦郡二見>
ターエ（田へ）・フーガエー（ふがよい――運がよい）・ヨメジョーサン（嫁じょさん）<豊浦郡湯玉>　マーンジューシャゲ（曼珠沙華）<豊浦郡吉母>　などがある。なかには偶発のものがあるとしても，多くは残存のものであろう。『全国方言資料』第５巻に所収された，島根県那賀郡雲城村の老人会話資料の中には，ナーント（なんと）・ミチーガ（道が）・ナーカッタ（なかった）・ナヤーノ（納屋の）・フーキカヤーテ（吹き返して）などが見えている。

方言上の長呼現象については，すでに九州方言における長呼現象が明らかにされている。<「国語方言上の一長音現象（「子」を「コー」と言うのなど）」藤原与一先生，国文学攷第30号>先生は『総体的には，この現象の成立は，新しくないだろう，と考えることができようか。』と論じておられる。その後，室山敏昭氏は「京都府与謝郡伊根町方言の音声生活について」（国語国文第36巻第12号）の中で，いわゆる裏日本的な音声現象のひとつとして，この現象を取上げられた。蓋井島の長呼現象も，さきの［ai］連母音の同化現象や，ラ行音節上の諸変化とともに，この方言の山陰九州系脈性を証するものと言えよう。

む す び

蓋井島の方言音声の二，三のことに注目するとき，この島の方言の一つの性格――山陰の方言，九州肥筑の方言にきわめて近いこと――が明らかになった。九州的なものとしては，連体助詞「の」が母音を落して撥音となることをもつけ加えたい。オナゴンコ（女の子）・イマンゴト（今のように）・ユーダケンコト（言うだけのこと）などの言いかたは，蓋井島ではきわめてさかんであるが，山口県の本土部ではまれなようである。蓋井島ではまたキモン（着物）・タキモン（焚物―薪）のように，語中の「の」も撥音化する。

この島の方言の山陰色，九州色は，単に音声面にあらわれるにとどまらない。表現

法の上にも多くのことを指摘することが出来る。九州のバイを想わせる，文末詞バヤが存することもその一つであろう。「コラー　アメジャロー　バヤ。（この天気では雨だろうよ。）」また「ギョキョーオバ　ナニ　セニャ　イケン　ホイネ。（漁協を，なにしなくちゃ，盛りたてていかなくちゃいけないのよ。）」のような「～をば」は九州のホンバ（本をば）の原形である。格助詞「から」が，手段や経由をあらわす意味にも用いられることも，九州の肥筑方言とよく似ている。

○フネカラ　イク。船で行く。

○オカカラ　イク。徒歩で行く。

○イヌカラ　カマレタ。（犬にかまれた。）

さて，これまで山陰的，九州的特性であるとしてあげてきたいくらかのことは，本土の長門域にも，残存，衰退の様相で分布していることが多い。その実態はそれぞれの項で見てきたとおりである。山陽路を進んできた言語波は，その西端の長門域――特に南部沿岸域――の方言をも多く改新したと思われる。蓋井島には，この言語波のとどくことが，地方（じがた）よりはゆるやかであったと考えられる。その山陰九州系脈性は，地方（じがた）の方言よりは留まりやすかったのであろう。

この小稿では，蓋井島の方言の山陰九州性を考察することを試みた。取上げた二，三の現象は，古態と呼び得るものであろう。この島のことばには，一方にはまた，言語改新の早さ，使用語の単純化を考えさせる諸現象も見られる。たとえば，長門でも筑前でもさかんなマ・バ行五段動詞のウ音便現象は，この島ではほとんどあらわれない。あるいはまた，打消過去の言いかたにしても，イカンカッタ（行かなかった）のように，ンカッタ一色で，長門の本土部とも，あるいは九州の筑前とも様相が異なっている。この改新，この単純化は何に起因するのであろうか。

長門と筑前の間に位置する島の，単一，単純な小集落（教職，僧職以外は全島同一職業でもある。）の言語生活はいかに形成されていくか，今後も考察を続けたい。

（1972．9．22）

この小論は藤原先生のご教示に多くを負うております。深く感謝申上げます。また調査に際しては吉津久子氏のご配慮と，蓋井島漁業組合長榊吉春氏をはじめ全島の方々のご協力をいただきました。厚くお礼申上げます。